

特集・新収蔵資料

近年新たに収蔵されたオススメ資料を紹介します

昔のピクニックセット?! 提重^{さげじゅう}



かつては「春山入り」といって近くの里山に出かけていき、屋外で飲食を楽しむ習慣がありました。春に里に下りてくるとされる山の神(田の神)をお迎えし、一緒に飲んで食べてもてなすのです。「提重」は、そのような機会に飯やおかず、酒などをコンパクトに持ち運ぶための道具で、いま風に言えばピクニックセットです。西津軽郡の農家で使われていました。同郡鱒ヶ沢町ではこの春山入りの習俗を「館講」と呼び、旧暦3月25日(又は4月8日)に、桜を愛でながら老若男女が飲食を楽しみました。「小学生の時はお祖母ちゃんを作ってくれた弁当、中学生の頃は鍋と肉を持って行って山で食べるのが楽しみでね。大人は食べるよりも飲んであちこち回って(笑)」(鱒ヶ沢町男性、昭和3年生まれ)。一見、信仰とは全く関係ないようにみえる現在の「お花見」も、実はこのような習俗に繋がっていると考えられます(民俗担当)。

進駐軍資料 アメリカ兵の私物箱



幅 69cm・奥行 36cm・高さ 37cm

左は、終戦後まもなく青森市内に駐留していたアメリカ兵の私物箱です。箱の上蓋には、ネコを図案化したマークがあります。これは、1945(昭和20)年9月25日に青森市内の海岸に上陸したアメリカ陸軍歩兵第81師団の別名「ワイルドキャット(山猫)部隊」にちなんだものです。最初の持ち主であったアメリカ軍兵士は、現在の青森高校の場所にあった日本陸軍歩兵第五連隊の兵舎を拠点に、県内の日本軍の武装解除等にあたりました。翌年1月30日に部隊は編成解除となって兵士達はアメリカに帰還しました。

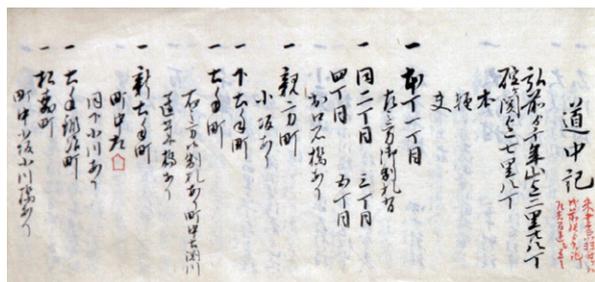
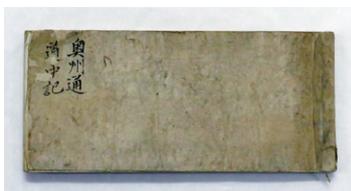
兵士は、何らかの事情で不要になったのでしょうか。兵舎の近くの商店に譲り渡したといえます。その後、この商店の御家族が最近まで保管し、当館に寄贈して下さいました。

進駐軍に関わる本資料は当館には類例がなく、将来的には、常設展などで紹介できればと考えています(歴史担当)。

弘前藩士の参勤交代の記録

おうしゅうどおりどうちゅうき
奥州通道中記

タテ 9.0cm・ヨコ 19.5cm
(閉じた状態)・横帳



「奥州通道中記」は、幕末に弘前藩士が記したと思われる江戸に向かう参勤交代の資料です。宿場間の距離や分かれ道、坂、休憩場所のほか、寺社や城などについての情報が記されています。さらに、関所での切手(通行手形)のやりとりがあること、また、川を渡る場合でも、橋で渡るのか、「瀬越」(歩いて渡る)、「船渡」かの区別があり、現在とはかなり異なる当時の旅の様子をうかがい知ることができます。

もちろん、弘前藩の参勤交代に際しての資料ですので、藩主ほか一行に加わった藩士達の道中での寺社への参詣や飛脚の動向も分かります。

そのほか、湯沢(秋田県)付近では小野小町とその父親の足跡、白河の関(福島県)ではかつてここを通った源義経など有名人の名前、古河(茨城県)では、古河城に埋葬されたという源頼政の首の伝説について言及があります。さらに、沿道で手に入る土産物や茶屋の名物まで、旅に関わる様々な情報が記されています(歴史担当)。

旅と俳句と酒を愛した版画家の作品集

『陸奥十二景』(晩夏の深浦)



1933(昭和8)年 タテ 7.5cm・ヨコ 23.5cm・多色木版

深浦 下山 木鉢郎
路は一ト筋 はまなすの砂丘
街は 洞門から続いて 海風ぐ
御飯屋の松高く 秋の雲浮く
漁村灰色に暮れて 虫なく
夕日明るく 風ぐ海の岩々

『陸奥十二景』は、下山木鉢郎(1901~1986年)が県内12か所の名所を題材に制作した多色木版画集で、彼の佳作の一つとされています。1933(昭和8)年に100部限定で頒布されました。

下山は、弘前市出身の青森県を代表する版画家で、旅と俳句と酒をこよなく愛する画家でもありました。棟方志功に版画の師である平塚運一を紹介し、彼が版画の道に入るきっかけを作り、共に日本板画院を創立して活動しました。結婚後には下澤姓になりました。

彼は、日本各地、特に郷里である青森の風景とそこに暮らす人々の姿を木版画の伝統を生かした高度な技術で表現し続けました。

この版画集の表紙には自身の詩歌や、船水公明、林征次郎、妻菊江らの短歌などが付されています。寄贈されたのは11点ですが、中でも人気のある「晩夏の深浦」を紹介しす。淡い色彩で夏の終わりの夕風の海を表現しています。添えられた文を読むとその光景が細部まで鮮明になるようです(美術担当)。

冬休み づくりまわし大会

郷土の伝統的な冬の遊びである「づくり」に親しんでタイムを競い合う「冬休み づくりまわし大会」を2022(令和4)年1月9日(日)に県総合社会教育センターで行いました。受付初日で定員に達してしまうほど人気の、当館恒例の冬のイベントです。

大雪の中でしたが、今年も楽しみにしていた小学生が家族の方々に参加してくれました。初めに郷土館職員がまわし方を教えて練習時間をたっぷりとり、参加者全員がまわせるようになりました。今年の低学年の部第1位の記録は24秒85、高学年の部第1位の記録は27秒25でした。来年度も開催しますので、是非ご参加ください。



今年も大人気!

ハチに擬態する「蛾」 - クロビロードスカシバ



開長 27mm

上の標本は、2020(令和2)年1月10日に日本鱗翅学会所属の工藤忠さんから当館に寄贈されました。2019(令和元)年7月に弘前市相馬地区で採取されたものです。2019年10月に新種記載され、発見された津軽地方にちなみ、学名は「*Paranthrene tsugaru*」、和名は「クロビロードスカシバ」として発表されました。

クロビロードスカシバは、ハチに擬態する蛾の一種です。羽を広げた際の横幅が3センチ弱、ハチに似た「透かし羽」に加え、胴体の黒と黄のしま模様が特徴です。この擬態は、鳥などの天敵から身を守るためとされています。また、飛び方や羽音までハチに擬態しているというのが驚きのポイントです。鳥などの天敵すら欺く生態に、舌を巻くばかりです。2019年12月には当館で展示し、その存在が周知されました。同種の発見例は世界で10個体ほどしかなく、希少性が高いものです。スカシバガ科の新種は、沖縄周辺の島を除くと、直近20年で3種しか見つかっていませんが、そのうち本種とミチノクスカシバの2種は県内で発見されたものです(自然担当)。



郷土館キャラクター

巡回展「ふるさとの宝物」、今年度の最終会場は平川市で12月3日～23日に開催しました。会期中の記念講座では、本県の忍者の実像に迫りました。

はじめての忍者 津軽の忍びの実像を求めて

近年「忍者」がブームです。

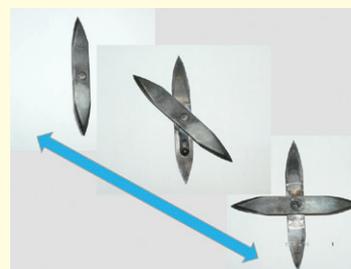
忍者といえば、黒装束で手裏剣を投げるイメージがありますが、実際はどうだったのでしょうか。様々な豪族が活躍した歴史ある平川の地で、忍者達の実像を探る体験型講座を開催しました。

まずは、研究史から、忍者の発生とその役割が戦国期から近世にかけて大きく変化した歴史を説明しました。忍者達が草、野臥、かまり等と呼ばれた理由として、野に伏せて潜行する専門技能を持っていたこと、その技は、幕末の弘前藩の忍者早道之者達も山野で「三寸草隠レ」「岩石隠レ」の術として稽古していたこと、本県南部地方浅田村柏木の百姓で忍術の達人喜作も同様の技を遣ったという伝承を紹介し、「野臥」を再現し実験してみた稽古会の様子も写真で紹介しました。

次に、早道之者やその支配頭が習得した弘前市無形文化財ト傳流剣術や、本覚克己流和などの古武道の技を解説付きで演武しました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため定員18名の講座でしたが、お年寄りの方々から大学生まで幅広い層の参加があり、初めて知る忍者達の実技に眼を丸くしていました。

(講師：学芸課副課長・学芸主幹 小山隆秀／12月18日(土)：平川市文化センターを会場に開催しました)



本覚克己流和が用いた可変式の大型手裏剣「遠車」(外崎源人氏再現、講師蔵)



弘前藩の忍者が習得した柔術「本覚克己流和」の絵伝書(近世後期、講師蔵)

青森県立美術館コレクション展 2021-3 「特集：縄文と現代」（10月1日～1月23日）
— 棟方志功と縄文～風韻堂コレクション・小野忠明：考古学とアートの間 —

青森県立美術館の第3期コレクション展で、縄文と関わりが深い青森県の芸術家達が紹介されました。当館からは棟方志功と小野忠明に関する考古資料94点を展示しました。

「棟方志功と縄文」当館の風韻堂コレクションは、青森市の医師大高興氏から寄贈された考古資料約1万点であり、この「風韻堂」の命名者は棟方志功です。志功は考古資料にも関心があり、考古学者とも交流がありました。大高家を訪れた志功は、収集品に感嘆し深く興味を持ったそうです。その際に収蔵庫に名称がないことから、志功自ら名称をつけることを進言しました。扁額「風韻堂」の書は彼の直筆であり、額も当時のままです。作品には、縄文土器が描かれたり、縄文の影響を感じる作風もあります。今回、縄文土器と同じ空間に展示されたことで、彼が受けた影響を感じ

とっていただけたのではないのでしょうか。

「小野忠明：考古学とアートのあいだに」 美術家・考古学者である小野忠明は志功の古くからの友人であり、志功の絵画開眼のきっかけとなった人物でもあります。戦後、忠明は県内で美術・社会科教師をし、考古学への関心が高まる高校生を学者として指導しています。当館からは忠明が携わった青森北高校考古学部旧蔵資料17点を展示しました。忠明の版画とともに、美術家・考古学者の忠明を、また高校の考古学部についても知って頂く機会となりました（考古担当）。



棟方志功の作品と風韻堂コレクション



小野忠明の版画と青森北高考古学部旧蔵資料

自然観察会実施報告



2021（令和3）年度は7月18日（日）に五戸町小渡平公園、10月17日（日）に六ヶ所村鷹架野鳥の里森林公園で自然観察会を実施しました。参加者はどちらも10名で、植物や昆虫、地質について観察を行いました。

小渡平公園では、コウライテンナンソウ、オニグルミの実、マタタビの葉、ニフトコの実、シロツメクサなど幅広く植物を観察できたほか、十和田火山から噴出した火砕流の地層やその地層に含まれる炭化木幹などを観察しました。

鷹架野鳥の里森林公園では、ガマズミの実やオオバヤシャブシなどの植物を観察し、午後は六ヶ所村猿子沢地内の露頭に移動し、そこで見られる地層からわかる大地の成り立ちについて解説を行いました。

青森県立郷土館の自然観察会では、会場周辺の地形・地質、分布する植物について総合的に観察を行い、自然界の仕組みやその成り立ちを学ぶことを目的としています。年2回、県内各地を会場に設定して実施していますので、ご参加をお待ちしております（自然担当）。

